第２章　平成19年度山口大学埋蔵文化財資料館の活動報告

当館は、昭和53年(1978)設置以降、山口大学構内が所在する山口県内の各遺跡の調査・研究を行うとともに、収蔵資料の展示・公開、また埋蔵文化財・考古学にかかわる教育活動を行ってきた。より具体的に述べると、展示・公開活動としては当館展示室における常設展示の他に年に１～２回の企画展示を行うこと、教育活動としては年に１回の市民対象の公開授業を開催すること、そして学内の希望者に対して考古資料の取り扱い等の技術指導を行うことなどである。その他にも、学内外のニーズに応じ、随時展示解説会や出前授業などを行っている。

平成19年度は、展示・公開活動として、常設展『山口大学 学宝展』、創立30周年記念特別展『稲作到来～弥生人 つくった とった たべた～』、第24回企画展『やまぐち古代の七不思議』を開催した。さらに資料館展示室以外での展示活動として、吉田構内総合図書館１階第２閲覧室にて『大学情報機構埋蔵文化財特別展』を、医学部大学祭「医学祭」では医学部図書館１階ロビーにてイベント展示『山口大学学宝展in小串』を、工学部大学祭「常盤祭」ではＤ講義棟１階ロビーにてイベント展示『宇部遺跡への誘いvol.１　波雁ガ浜遺跡展』を開催した。

社会教育活動としては、教育学部との共催により第６回公開授業『古代人の知恵に挑戦！－古代のお米をつくってみよう２－』を開催した。また、山口市立小郡小学校６年生児童の集団展示見学を受け入れ、展示解説を行った。この他、地域ＮＰＯ法人との連携で『築窯ワークショップ～野焼き体験・古代人に挑戦～』を開催した。

当年度は、本学吉田構内以外の場所で埋蔵文化財の展示を実施した他、ＮＰＯ法人との連携事業等新たな資料公開・社会教育活動に取り組んだ。次項よりその詳細を報告する。

表4　埋蔵文化財資料館利用者の推移

年度	平成7	平成8	平成9	平成10	平成11	平成12	平成13	平成14	平成15	平成16	平成17	平成18	平成19
利用者総数	355	267	191	200	516	142	555	573	913	669	808	1157	1228

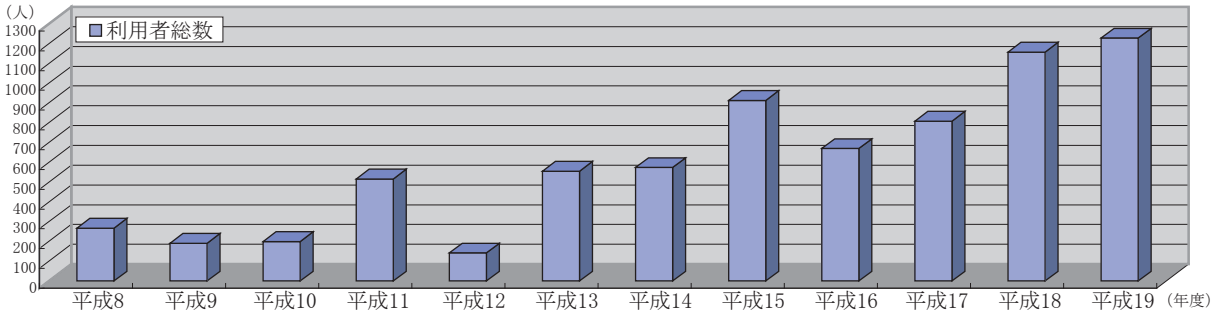
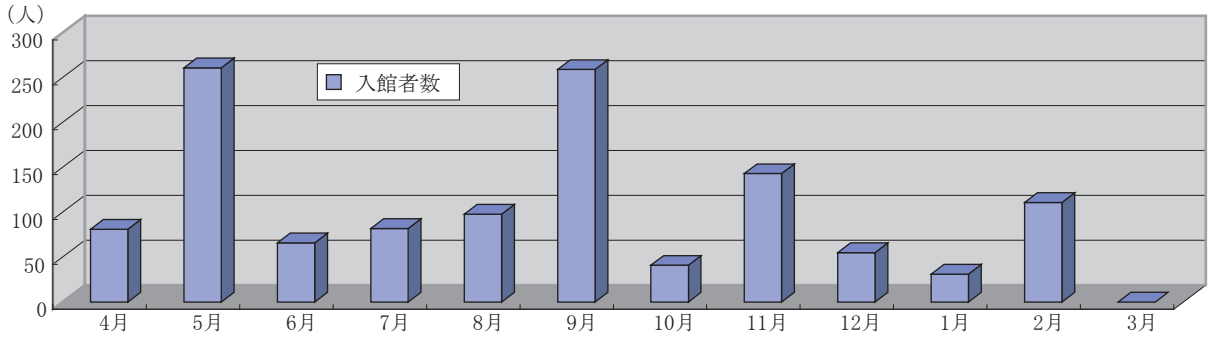


表5　平成19年度月別入館者数

月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
入館者数	81	261	66	82	98	259	41	143	55	31	111	休館



第１節　資料館における展示公開活動

創立30周年記念特別展（第23回企画展）『稲作到来～弥生人 つくった とった たべた～』を開催

埋蔵文化財資料館は、平成19年度をもって創立30年を迎えた。当館は30年間に渡り一貫して本学構内に埋存する遺跡の保護を主要業務としてきたが、その一方で出土資料を用いた展示公開事業、考古学を素材とした体験学習を主とする社会教育事業も展開してきた。そこで平成19年度最初の資料公開活動として、当館に蓄積された本学構内遺跡の調査成果と社会教育活動成果とを融合させた企画展示を、創立30周年記念事業の一環として実施することとした。

山口市に所在する本学吉田構内は、旧石器時代から江戸時代までの遺構・遺物が包含される複合遺跡であるが、昭和41年から開始された本学統合移転に伴う発掘調査により、まず注目されたのが構内南西部の沖積平地部における弥生時代集落跡の発見であった。この集落跡はその後「遺跡保存公園」という名称で現在でも保存されている。その後、周辺域及び構内西部の低丘陵部にまで弥生時代の遺構・遺物が分布することが確認され、弥生時代前期から終末期にかけての集落形成の変遷が徐々に明らかとなりつつある。一方、当館が平成13年度から実施している市民講座「公開授業」では、平成16年度より「弥生土器づくり」を、平成18年度より「弥生時代の米づくり」をテーマとし、弥生時代の生活文化の実態を復元する取り組みを行ってきた。

そこで特別展では「弥生時代の食生活」を主題に、吉田遺跡出土の弥生時代資料の他、環濠内から多くの木製品が出土した宮ヶ久保遺跡（山口市阿東所在）の出土品、米、大豆、クリなどの炭化穀物が多量に出土した下村遺跡（美祢市所在）出土品（以上（財）山口県埋蔵文化財センター所蔵）、弥生時代の貝塚遺跡として著名である北迫遺跡（宇部市所在）出土品（宇部市教育委員会所蔵）、そして参考資料として木製農耕具を始め多種に渡る動植物遺存体が出土している東奈良遺跡（大阪府茨木市所在）の出土品をそれぞれ借用し、展示を行った。また、展示室の一角に「公開授業コーナー」を設け、様々な実験成果を解説し、授業風景の映像などを公開した。

４月２日から６月１日までという短期間の展示であったが、約350名の入館者を迎えることができた。入館者からは、木製農具や穀物類などの有機物が遺存していることへの驚きとともに、「思ったより豊かな食事をしていたことが分かった」「狩猟の方法も教えて欲しい」「古代米づくりに参加したい」などの感想や要望が寄せられ、当館の多様な活動に対する評価とともに様々な需要をも感じることができた。

写真 45　第 23 回企画展ポスター

写真 46　企画展の模様

平成19年度常設展『山口大学 学宝展』を開催

平成19年度の常設展では、山口市に所在する本学２地区（吉田遺跡・白石遺跡）から出土し、当館に所蔵されている埋蔵文化財資料の中で、地域史を叙述する上で欠かせない資料72点を「山口大学所蔵貴重学術資料＝学宝」と位置づけ、公開を行った。展示品の内訳は、吉田遺跡出土品に関しては旧石器時代資料２点､縄文時代資料４点（土器３・石器１）､弥生時代資料９点（土器４・石器３・土製品１・ガラス製品１）、古墳時代資料27点（土器13・石器８・土製品６）、奈良時～平安時代資料19（土器15・木製品２・石製品１・銅製品１）､室町時代資料３点（瓦質土器３）､白石遺跡出土品に関しては古墳時代資料７点（土器３・木製品４）である。

６月25日から10月12日までの開催期間に､約550名の入館者を迎え入れた。アンケート調査の回答を見ると、１番印象に残った展示物は「石製丸鞆」の回答が最も多く、次いで「ガラス小玉」であった。土器類に関しては、各時代における特徴的な器形の資料を展示したものの、観覧者の目には「似たような土器」と映ったようでる。各資料の個別解説の不足が招いた結果であり、真摯に反省したい。

また、同時にアンケートにて「山口大学にあるもの（学術資料・図書・建物・自然、何でも結構です）であなたが「これはスゴイ！」と思う物は何ですか？」という調査を行ったところ、最も多かった回答は「キャンパス内にいる猫・池の鯉」などの動物であり、次いで「自然」、次いで「構内の広さ・広大な農地・教室」などの設備関係という結果となった。「学術資料」「出土品」「図書館蔵書」という回答もあったがいずれも１票に止まっている。設問に無回答のアンケートも多く、一概にこの結果が本学の平均的な印象を示すとも限らないが、学生や市民を中心とする入館者が本学に対し「環境面では恵まれているが、研究素材（人材を含む）には満足できない」と感じている可能性は高いと言って良いのではなかろうか。

当館は学内での開発に伴う文化財保護業務を行い、得られた成果を書籍やインターネット、そして実物展示を通して広く学内外に公開することを主要業務としている。近年は入館者も増加傾向を示しているが、これは学外者（市民）の来館によるところが大きく、学生および教職員の入館数はほぼ横這い状態にある。換言すると、地域連携・社会貢献面では一定の成果を得ているが、本学の教育・研究への貢献度には変化がないということにもなる。当館が今後も埋蔵文化財を主とする学術資料を公開し続けることに変わりはないが、山口大学では資料展示機能を有する数少ない施設として、他分野の本学所蔵学術資料や研究成果を公開する取り組みも視野に入れつつ今後の展示活動方向性を再考したい。

写真 47　平成 19 年度常設展ポスター

写真 48　常設展の模様

第24回企画展『やまぐち古代の七不思議』を開催

平成19年11月３日から平成20年２月29日までの期間、当館展示室において企画展『やまぐち古代の七不思議』を開催した。

埋蔵文化財を含め歴史資料を取り扱う展示では、「この資料の存在によりここまで歴史が解明された」というテーマで開催されるのが常であるが、当企画展では逆に「資料は存在するものの未だ解けない古代山口県の謎」をテーマとした。素材としては、①王屋敷（向津具）遺跡出土有柄銅剣、②沖ノ山出土の無文土器系甕と半両銭、五銖銭、③土井ヶ浜遺跡出土の弥生人骨、④明地遺跡出土の分銅形土製品、⑤神田山石棺蓋石の盃状穴、⑥萩見島のジーコンボ古墳群出土品、⑦石城山神籠石出土品と土塁という、考古学史上でも著名である山口県の７遺跡（遺物）を取りあげた。

宇部市教育委員会、土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム、光市教育委員会、（財）山口県埋蔵文化財センター、山口市教育委員会、山口大学人文学部考古学研究室の協力により、展示では実物資料および複製品を多数公開することができた。それと同時に、各遺跡・資料の概要とともに現状の考古学研究において各遺跡の評価が定まらない原因をパネル解説した。

企画展開催中、入館者は340名を数えた。アンケート調査によると、一番印象に残った展示物については「土井ヶ浜遺跡の弥生人骨出土模型」との回答が最も多く、以下は「分銅形土製品」「盃状穴」「ジーコンボ古墳群」の順であった。また、「『山口県の文化財』と聞いてあなたが思い浮かべるものは何ですか」という設問に対しては、「瑠璃光寺五重塔」が回答の20％を占めており、複数票を集めた他の回答には「錦帯橋」「土井ヶ浜遺跡」などがあった。全体的な傾向としては室町時代（大内氏関係）と江戸時代末から明治時代初頭（毛利氏関係）の文化財に回答が集中しており、改めて当県の歴史・文化に対する市民の興味傾向と認識度を確認することができた。

当館の企画展に関しては、「縄文時代に的を絞って弥生が開花する前の状態を知りたい」「山口盆地の遺跡に関して」「県内の山城に関して」「土器の見方」など、埋蔵文化財を素材とした展示を希望する声の他に、「100万年前から現在までの地形の変化を学べる展示」「山口の歴史を食べ物の移り変わりから見た展示」「イギリス文化史」「恐竜や植物の化石」などを希望する声も多数寄せられた。これらの要望は、当館に埋蔵文化財資料の公開活動に止まらず「大学博物館」としての役割を求めるものであろう。今後ともアンケート調査を続けながら、学内の他分野研究との連携の可能性を模索したい。

写真 49　第 24 回企画展ポスター

写真 50　企画展の模様

大学情報機構2007 in 医学 Fes.にて企画展を開催

平成17年度より、当館とメディア基盤センター、図書館で組織される大学情報機構は、姫山祭(山口市吉田キャンパス大学祭)にイベント参加を行ってきた。本年度より活動範囲を医学祭(宇部市小串キャンパス大学祭)と常盤祭(宇部市常盤キャンパス大学祭)まで拡大し、「大学情報機構2007」と題する各組織の特徴を生かしたイベントを開催することとなった。

平成19年度医学祭会期中の11月10日に、医学部図書館１階ロビーにて「大学情報機構2007 in 医学 Fes」を開催した。医学部図書館は『オープンライブラリー2007　写真と資料で見る山口大学の移り変わり』と題し、新制大学として誕生した昭和30年代の本学の学生生活の様子を公開した。メディア基盤センター小串センターは、『お祭広場ＬＩＶＥカメラ』と題し、医学祭のメイン会場である「お祭り広場」の様子を学内ネットでストリーミング配信を行った。当館は３組織の中で唯一医学部キャンパス内に施設を持たないが、吉田キャンパス総合図書館の協力により、展示ケース１台とパーティションボード１枚を搬入し、医学部キャンパスでは初の埋蔵文化財資料展を開催することとした。

当年度には、当館展示室での常設展を『山口大学学宝展』と表して当館が所蔵する構内遺跡出土品の中でも特色ある資料を選定して公開したが、これは対象範囲を吉田構内(山口市)が所在する吉田遺跡と、白石構内(山口市)が所在する白石遺跡に限定したものであった。そこで今回の資料展示では『山口大学学宝展 in 小串』と題して、同じく周知の埋蔵文化財包蔵地内に所在する小串構内(宇部市)での発掘調査により出土した資料の公開を行った。

小串構内が所在する山口大学医学部構内遺跡は、小串丘陵南端裾部に広がる低地に位置しており、現地表高は約３ｍである。現在でこそ南方の瀬戸内海岸線から約1.5kmの距離を有しているが、中世までは真締川河口部の汽水域となっていたようで、地下には海成砂層や真締川上流より運ばれた土砂が分厚く堆積している。各層内には包含密度の差こそあるものの旧石器時代から江戸時代までの遺物が含まれている。今回の展示では、小串旧石器資料、縄文時代から古墳時代の土器資料、中世土器および古銭、江戸時代の煙管や将棋駒など計21点を新たに『山口大学所蔵貴重学術資料＝学宝』と位置づけ、公開を行った。

当日は医学部図書館が通常開館であったため、利用者の迷惑とならないよう最小限の展示解説を行うに止めた。見学者は約50名と少数であったが、出土地での資料公開の重要性を再認識させられた。

写真 51　展示ポスター

写真 52　展示の模様

大学情報機構2007 in 常盤 Fes.にて企画展を開催

平成19年11月24日、本学工学部が所在する宇部市常盤キャンパス大学祭「常盤祭」にて、大学情報機構主催イベント「大学情報機構2007 in 常盤Fes.」を開催した。

当日はD講義棟１階ロビーを会場とし、工学部図書館はパネル展示『写真で見る山口大学工学部の今昔』を、メディア基盤センター常盤センターはインターネットを通じた常盤祭のストリーミング配信『常盤祭ＬＩＶＥカメラ』を、そして当館は資料展示『宇部遺跡への誘いvol.１ 波雁ガ浜遺跡展』を開催した。

山口県の瀬戸内沿岸部では古墳時代から古代にかけての土器製塩遺跡が複数ヶ所で発見されているが、拠点的製塩遺跡と目されるのは美濃ヶ浜遺跡（山口市秋穂所在）と波雁ガ浜遺跡（宇部市東岐波所在の２遺跡である。美濃ヶ浜遺跡に関しては、昭和35年に実施された学術調査に山口大学古代遺跡調査室が参加し、翌36年に実施された波雁ガ浜遺跡の緊急発掘調査では当時本学教育学部の教官であった小野忠熙氏が調査を担当した関係か、当館には両遺跡から出土した資料が多数収蔵されている。今回の展示では宇部市に所在する拠点的製塩遺跡の波雁ガ浜遺跡出土品（製塩土器約200点）を公開するとともに、製塩風景模型と解説パネルによって日本列島における土器製塩の歴史と製塩方法、製塩土器の型式変遷について説明した。また、宇部市に所在する古墳時代の著名遺跡で現在でも現地見学が可能であるある松崎古墳、棚井古墳群、若宮古墳、花ガ池窯跡のパネル展示を行い、今回の展示で郷土の先史時代に興味を抱いた学生および市民が直に遺跡に触れることができるよう、遺跡マップを配布した。

常盤祭メイン会場に隣接していることもあり、展示会場は多くの人々で賑わったが、その大多数はメイン会場への抜け道としての通過者であり、残念ながら展示に足を止める人は少なかった。医学祭での取り組みを含め、当館としては初めて本学吉田キャンパス以外での資料展示を試みたが、いずれも成功とは言い難い結果である。問題点を挙げるとするならば、やはり大学祭という華やいだの雰囲気に考古資料がそぐわないことであろう。特に学生にとっては大学祭はやはり「祭り」であるようで、実物資料のみならず解説パネルまで観覧いただいたのは学外者（市民）と教職員に限られた。将来的にこの大学情報機構の取り組みが継続するかは不明確であるが、大学祭で埋蔵文化財を素材とするイベントを実施する際には、体験型イベントや動画コンテンツなどを併用した実物資料展示が望ましいのかも知れない。そうした意味では、本年度の取り組みは当館の今後の活動を考える上で非常に重要なものとなった。

写真 53 展示ポスター

写真 54 展示の模様

第5回～第7回大学情報機構埋蔵文化財特別展を開催

当年度より会場を総合図書館入退館ゲートから１階第２閲覧室へと変更している。

第５回大学情報機構埋蔵文化財特別展示『あしもとの遺跡シリーズ３　白石遺跡』

平成19年４月２日から６月15日の期間で開催した。白石遺跡は山口盆地の中央部に位置する集落遺跡であり、鴻ノ峰から南方に派生する丘陵裾部に立地している。現在遺跡内には教育学部附属幼稚園・山口小学校・山口中学校が所在しているが、そもそもこの地が周知の埋蔵文化財包蔵地に登録されたのは昭和58年に実施された山口小学校グラウンド内での試掘調査が契機となっている。その調査では、古墳時代中期の竪穴住居と弥生時代終末から古墳時代初頭に機能していたと推定される溝状遺構、遺物包含層などが確認されている。今回は昭和58年の調査で竪穴住居跡から出土した土器資料、溝状遺構から出土した木製品を中心に資料展示を行った。

第6回大学情報機構埋蔵文化財特別展示『山口県遺跡めぐりシリーズ3　須佐唐津古窯跡』

平成19年６月18日から10月26日の期間で開催した。須佐唐津古窯跡は、萩市唐津(合併前住所:阿武郡須佐町唐津)に所在する県の指定史跡であり、列島最古級の青磁窯として著名である。

窯跡から産出された「須佐焼」に関しては、古くよりその存在は知られていたものの、現地の古文書や陶工の過去帳の類が江戸時代の火災により焼失したこと、昭和に至り陶工が萩に転出したことなどが原因で、長らく実態不明の陶磁器として様々な憶測を呼んでいた。「古須佐は青磁なり」という口伝が存在する一方で地元に伝わる陶磁器に大陸産古青磁と見紛うような優品も散見されるため、昭和30年代にはこれらが須佐焼か大陸からの伝来品かで論争が繰り広げられるにまで至った。この論争を決着すべく、昭和38年以降地元の有志が分布調査や試掘調査を行ったところ、大量の陶磁器片が散布する地点が特定された。昭和41年には須佐町教育委員会を調査主体とする学術発掘調査が実施され、３基の窯跡と２ヶ所の物原が確認されたのであるが、本学教育学部教授(当時)小野忠熙氏が調査担当者として参加していたことから、当館には青磁・陶器類を中心とした出土品が部分的に収蔵されている。

今回の展示では、須佐唐津窯跡発見の経緯を解説するとともに「まぼろしの須佐青磁」とも呼称される青磁と、擂鉢等の陶器類、窯道具の実物資料を公開した。

第7回大学情報機構埋蔵文化財特別展示『あしもとの遺跡シリーズ4　弥生時代の吉田遺跡』

平成19年10月29日から平成20年３月28日の期間で開催した。吉田遺跡は旧石器時代以降江戸時代までの資料が包蔵される複合遺跡であるが、現在のところ確実な集落跡の確認は弥生時代以降となっている。弥生時代集落は吉田キャンパス西部の沖積平地から北東部の低丘陵地を中心に展開している。展示では、竪穴住居や土壙から出土した土器資料の他、石庖丁や石鎌、ガラス小玉を公開した。

写真 55　第6回大学情報機構埋蔵文化財特別展の模様

写真 56　第7回大学情報機構埋蔵文化財特別展の模様